

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月22日現在

機関番号：3 4 4 1 9

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2 0 0 9 ~ 2 0 1 2

課題番号：2 1 7 2 0 0 9 5

研究課題名（和文）

マーク・トウェイン文学とニューメディアの関連についての研究

研究課題名（英文）

A Study of Mark Twain and the New Media

研究代表者 辻 和彦

(TSUJI KAZUHIKO)

近畿大学・文芸学部・教授

研究者番号 7 0 3 4 5 6 6 9

研究成果の概要（和文）：

4年という研究期間の中で、ジョージ・ワシントン大学ゲルマン・ライブラリ、ニューオーリンズ大学附属図書館アル・K・ロング・ライブラリ、ニューヨーク・パブリック・ライブラリ、モーガン・ライブラリなどを巡り、多彩な資料の発掘に成功した。またウェブ・サービスを使用することにより、研究資料の迅速なアクセスや成果公開を達成した。さらに学会発表、論文発表、図書出版などの手段により、研究期間内に多くの研究成果を公表し、一定の評価を得た。

研究成果の概要（英文）：

In the four years, the research on this subject had been done in the Gelman Library of the George Washington University, the Earl K. Long Library of University of New Orleans, the New York Public Library, and the Morgan Library in New York, and, therefore, they brought some fruitful successes. By using of the web service, quick inputs and outputs to the archives of the research were achieved. The results of the studies were exhibited in the presentation and the publication, and it is gaining not a few values.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：英米・英語圏文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：ポスト植民地主義、文化研究、歴史、社会研究、英米文学、西洋古典

1. 研究開始当初の背景

本研究計画においては、トウェインがその生涯の中で絶えず、当時のニューテクノロジーに関心を持ち、また自身の作品をどのような形態で発表するかという、「メディア」に拘っていた伝記的事実を出発点とし、彼の作品やその背後の世界観がいかに「ニューメディア」との繋がりの中で築き上げられ、高められたかという点を明らかにするつもりであった。「ニューメディア」という視点から、これまであまり触れられることが少なかった彼の青年期の文学作品や、老年期の手稿などを再分析することが可能であるはずであり、また『ハックルベリー・フィンの冒険』（1885）のようなよく知られた、いわゆる「正典」作品の意味を再度問うことも可能になるはずである。

先行研究としては、Bruce Michelson による *Printer's Devil* (2006) などが挙げられるであろう。だが本研究においては「ニューメディア」という語が意味するものを、必ずしも印刷業や出版業の中に位置するものとして捉えているわけではなく、私生活でも通信や電話など時代の最先端テクノロジーに絶えず関心を持ち続けたトウェインに関わる、表現手段や「媒体」全体を指し示すものとして規定したい。従って、彼の好奇心を惹きつけ続けた「心霊通信」のような神秘主義的なものも研究対象とし、それらがトウェイン文学においてどのような意味を持つのかという点も論考しなければいけない。いずれにしてもこうした観点からの研究は国内外において、まだ十分に行われておらず、本計画が果たす役割は小さくないはずであるという観点から研究計画を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、四年間という時間の中で、トウェインが当時における新しいメディアとどのように具体的に関わり、どのようなヴィジョンをそこから得たのか、という点をできるだけ明らかにすることであるが、その前提条件として、トウェインの膨大なテキスト、それにまつわる資料、批評史、先行研究などを探り、分析する必要がある。こうした作業と並行して、現地の資料収集や米国研究者達との意見交換を経てさらに論考の基盤を補強し、複数の視点から見ても齟齬がないようなトウェイン論を構築するというのが、最終的な目的であった。

また上記のような作業過程を経る予定であったので、トウェインとニューメディアとの関係を、少なくとも以下の三項目に統べるかたちで、期間内に明示したいと考えた。

1. 伝記的事実におけるトウェインとニューメディアの関係。
2. トウェインが産み出した文学テキストにおけるニューメディアの描写。
3. トウェイン自身、及びその時代思想におけるニューメディア発達の位置付け。

なお先に述べたとおり、「ニューメディア」という語は一義的には当時において隆盛を誇っていた新聞、雑誌、電信等を指し示すが、本計画においては、より広範囲に電話、音声記録装置、心霊電信なども含め研究を押し進めた。

結果的には、上記の三項目を中心とした研究課題に対し、十分なだけの資料を蒐集でき、またそれを巡る考察ができた。その意味で当初の研究目的のほとんどは達成できたと考えられる。

3. 研究の方法

本研究の方法としては、前段階としてまず資料収集とその解析期間を置き、その後次の段階として、他研究者との交流による情報収集、論文や口頭発表による小幅な成果発表などの過程を辿り、そして最後の段階として、書籍（電子化も含む）のかたちで成果の全体像を世に公表するという計画を描いていた。特にインターネット・サーバ運営などによる研究の電子化は、アメリカへの資料収集出張と並ぶ本研究計画の目玉であり、必要となる資材を年度毎に順に買い揃えて、研究体制を完成させることを予定していたが、概ねそのとおりに行えたと考えている。

当初予定していた研究方法のプロセスを経ることにより、多くの視点によって自論を鍛え上げ、欠け落ちる部分を補強、補完して、より磐石な体制で研究成果を公表することができると思った。そしてその過程自体も、電子配布や DTP などの手段により、従来よりも短縮できるという見通しも立てられた。コンピュータやネットワークにより援護されたこうした研究方法が、本研究の独創的な点であるが、「ニューメディア」という新しい観点からトウェイン文学の読み直し、掘り起こしを狙うという主題そのものが最大の特色であることは間違いない。「新しい視点」こそが、デジタル・ネットワーク時代の文学研究に新しい局面をもたらすものなのであり、その意味では、本研究計画はその対象（「ニューメディア」とトウェイン文学）も、その目指す方法も（デジタル機器を用いた文学研究スタイル）、ほぼ合致しており、こうした観点も最後まで貫くことができた。

もちろんあらゆる研究計画がそうであるように、当初予想していなかった困難もあ

った。そもそも科研費に応募した段階では、福井大学教育地域科学部に所属していたのであるが、支援を受ける年度に近畿大学文芸学部に移籍し、異なった環境での計画通りの研究予定を達成するには、それなりに厳しいものがあった。同様にアメリカでの資料蒐集にも予想を上回る困難があった。しかしながら、先に述べた通り、できる限り当初練り上げた研究方法を維持しつつ、柔軟にそうした局面を開き、以下に述べる成果に結びつけることができた。

4. 研究成果

本研究の成果は、学会発表、学会誌論文、図書出版などのかたちで既に公開されたものとなった。そのうちの代表的なものは、下記に記したとおりである。

研究期間の四年間でインターネット・サービスを巡る状況はめまぐるしく変化し、いわゆる「クラウド化」が急速に進んだことにより、計画していた自前のサーバ運営が、そうしたサービスにあらゆる面で、必ずしも優っているとは言い難い状況となった。より安価に、より安易に、あらゆる場所と繋がる SNS などのインターネット・サービスの高度な発展は、予想を上回るものがあったものの、しかしながら、個人の研究者による「研究」というものの場合は、セキュリティや情報保持の確実性などの観点から、自力でサービスを確保することにまだある程度の利便性があるのは否定できない。それが確認できたという意味でも、「コンピュータやネットワークにより援護された新しい文学研究方法」を模索するという本研究計画の一側面は、十分な役割を果たせたと考えられる。

またジョージ・ワシントン大学ゲルマン・ライブラリ、ニューオーリンズ大学附属図書館アル・K・ロング・ライブラリ、ルイジアナ州立博物館、ヒストリック・ニューオーリンズ・コレクション、ニューヨーク・パブリック・ライブラリ、モーガン・ライブラリなど、各地で資料蒐集を行ったことは、本研究の主題である「マーク・トウェイン文学とニューメディアの関連についての研究」についての調査を深められたのみならず、貴重な資料の掘り起こしという意味でも、大いに意味があった。例えばアル・K・ロング・ライブラリにおける十九世紀の墓地の埋葬記録などは、なかなか紹介されることのない興味深いものであった。こうした研究資料蒐集旅行などで立ち寄った各研究施設などでの専門家の助言や質問なども、大変貴重なものであり、研究を巡るそうしたすべての派生物を入手できたのも、本研究計画が科学研究費による助成を受けられたからである。

この後は、当初の研究計画通り、DTPソフト操作作業などによる、いわゆる「デジタル・パブリッシング」などの手段を用いて、これまで得られた全研究成果を図書とかたちで世に問うつもりであるが、それなりの評価を得ることができるはずであるという予測が、十分に立てられる程度までは、目標とした個々の事柄は達成できたと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

1. フォーラム: 「ホワイト・ライト/ホワイト・スノウ」辻和彦, 2011年6月, 日本マーク・トウェイン協会『マーク・トウ

ェインー研究と批評』第10号: 29-31, 査読有

2. 「改訂された兵士 —マーク・トウェインの初期短編を巡って」辻和彦, 2010年3月, 近畿大学文芸学部『文学・芸術・文化』第21巻第2号: 121-137, 査読無

3. 「純潔の価格 —「ワッピング・アリス」再考」辻和彦, 2009年4月, 日本マーク・トウェイン協会『マーク・トウェインー研究と批評』第8号: 102-11, 査読有

[学会発表] (計 4 件)

1. “Introduction: Bomb the “Dirty” Osaka” 辻和彦, (シンポジウム司会兼コーディネーター), 2012年8月31日, 第18回 ASLE-Japan/ 文学・環境学会全国大会シンポジウム 1「古典と環境」(於近畿大学本部キャンパス, ブロッサム・カフェ)

2. 「どちらが夢か? マーク・トウェインと「非西欧」」辻和彦, 2012年4月21日, 日本比較文学会関西支部例会(於甲南大学)

3. 「マーク・トウェインと犬を巡る言説について」辻和彦, 2011年10月9日, 第50回日本アメリカ文学会全国大会シンポジウム(関西支部発題)『あめりか・いきものがたり—動物表象をめぐる』(於関西大学千里山キャンパス)

4. “White Light/White Snow” 辻和彦, 2010年10月8日, 日本マーク・トウェイン協会第14回全国大会トウェイン没後

100周年記念国際フォーラム『マーク・トウェインとは誰か？ ロバート・H・ハースト編集長と語る』（於慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎）

〔図書〕（計 2 件）

1. 『カウンターナラティブから語るアメリカ文学』（伊藤詔子監修，辻和彦，執筆者20名）2012年10月，音羽書房鶴見書店，378pp(辻執筆部分：「犬の天国と人の地獄トウェインと犬を巡る言説について」 91-105)。

2. 『マーク・トウェイン文学文化事典』（亀井俊介編，辻和彦，執筆者17名）2010年10月，彩流社，482pp（辻執筆部分：トピック 5 項目（90-91, 109, 133-134, 219））。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻 和彦（TSUJI KAZUHIKO）

近畿大学・文芸学部・教授

研究者番号：70345669

(2) 研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3) 連携研究者

（ ）

研究者番号：